

# 地域プロジェクト成果報告書「認知科学で学ぼう」

メンバー 東口愛羅 太田良真 Williams 信介 赤坂裕太

## 背景・目的

前期では、函館での心理学系の講演やワークショップが少ないことに着目し、地域の方々に認知科学などの心理学に触れてもらうことを目的とした。

後期では、前期の活動を踏まえ、地域貢献とは何か、その手段として心理学を取り入れることができるのかを検討した。

## 概要

前期では、3度のワークショップを経験し、1回目と2回目ではアシスタントとして参加しました。3回目では、先生に提案していただいたテーマに沿ってワークショップを企画し、後期に学生主体で企画・立案・運営するための経験を積みました。

後期では、実際にテーマ、場所、日時の設定やワークショップの内容などを一から企画・立案・運営しました。

## スケジュール

- 4月17日 地域プロジェクト配属チーム決定
- 4月23日 第一回ワークショップ(テーマ：アクティブラーニング)
- 4月24日～5月19日 第二回ワークショップ(テーマ：創造性)のテーマ考察
- 5月20日 第二回ワークショップ開催(開催場所：はこだてみらい館)
- 5月21日～7月1日 第三回ワークショップのテーマ考察・選定(テーマ：錯視)
- 7月2日 第三回ワークショップ開催(開催場所：はこだてみらい館)
- 7月3日～7月14日 中間発表に向けての準備
- 7月15日 中間発表
- 10月3日 地域プロジェクト初回集まり
- 10月11日～11月22日 ワorkshopのテーマ考察・選定・準備  
(テーマ：勉強に役立つ心理学)
- 12月26日 ワorkshop開催  
(開催場所：函館市青年センター)
- 1月11日～1月19日 成果発表に向けての準備
- 1月20日 地域プロジェクト成果発表



## プロセスと成果

4月23日は林先生主催の第1回ワークショップに参加した。参加者数は5人(大人3人 子供2人)で、メンバーのうち3人は大人の参加者と一緒に、教育現場で主流になりつつあるアクティブラーニングを体験した。また、残りの2人は参加者のお子さんを預かり、絵を描いたり折り紙などで交流した。

5月20日には第2回ワークショップを開催した。参加者数は大人4人で、林先生が事前に決めたテーマ・内容で準備・実施した。用意したブースは3つあった。1つ目は創造性計測テスト、2つ目はBrain Writing法の体験、3つ目は、洞察課題を用いた創造性を上げるコツの紹介であった。参加者には初めに第1ブースにて創造性を計測してもらい、第2第3ブースを経た後、再度創造性を計測してもらうことで、創造性の向上を体感してもらった。

7月2日は第3回ワークショップを開催した。参加者は30人程度だった。錯覚をテーマに、メンバーでブース内容を考案した。平面錯視をポスターや動画で展示するブース、立体錯視の展示とそれらをキットとしてまとめ、実際に作ることが出来るブース、視覚情報によって味覚が変化する錯覚を、かき氷を用いて体験するブースの3ブースに分かれ、地域の方にそれぞれ体験してもらった。

後期は、テーマ決めや開催日時と場所などの企画・立案・運営を全てメンバー主体で行った。10月は、一人ひとりテーマ案を持ち寄ってプレゼンテーションを行い、ワークショップのテーマを決定し、準備に取り組んだ。11月には、場所や日時の交渉を始め、函館市青年センターで行うことを決定した。

12月26日に後期ワークショップを開催した。参加者は11人(大人7人 高校生2人 小学生2人)だった。ブースを2つ設け、1つ目は、色と香りの心理学をテーマに色と香りの組み合わせで得られる効果(リラックス・目覚まし・疲労回復・気分高揚)を紹介・体験。勉強の合間でリラックスしたいとき、集中したいときに使える組み合わせを考えてもらった。2つ目は、地域について考えるアクティブラーニングをテーマに、「地域貢献とは何か」「どんな街に住みたいか」についてディスカッションし、地域について考えてもらった。



## 地域からの声

### 前期第3回

- ・すごく簡単に脳がだまされることに驚きました。(10代男性)
- ・他も調べてみようと思います。(10代男性)
- ・何かに集中していると、他が不注意になるということがよくわかりました。(20代男性)
- ・久しぶりに勉強した気分でした。子どもが大きくなったらこういうワークショップにまた参加させたいです。(年齢性別不明)

### 後期

- ・出身地が地域別に違ったから人それぞれの意見をきけて楽しかったです。(21歳女性)
  - ・において人をだませる、中学高校大学につながっている。(11歳男性)
  - ・心理学のもっと深いところまで知りたいです。有難う御座いました。(17歳女性)
- ワークショップ参加者に5段階評価でアンケートを行ったところ、概ね高評価をいただいた。

## 反省・総括

前期では、報告・連絡・相談が不十分だったことや、ワークショップの対象年齢の配慮が不足していたことが反省点として挙げられた。これらを踏まえ、後期では密に連絡を取り合い、メンバー間での情報共有を徹底した。また、ワークショップの対象年齢を事前に設定し、それに沿ったブース内容を意識した。対象に定めた高校生の参加は少なかったが、結果的にはさまざまな年齢の参加者にも楽しんでもらうことができた。

後期の反省点として、1つ目は必要なもののリストアップ化をすべきだったことである。開催場所の決定の遅れたことや、ワークショップ直前に必要なものが足りないことに気付くなどのアクシデントが起きてしまったことなどから、早期の事前準備が今後の課題として挙げられるだろう。2つ目は、アンケートの内容が不十分だったことである。今回の感想を尋ねる内容ばかりで、準備する上で何が効果的なのかわからなかったため、今後のワークショップ開催につながるフィードバックのあるアンケートを作成すべきだった。

総括として、1年間のプロジェクト活動を通しはつきりと形にできたものはなかったが、ワークショップを通して大学と地域のコミュニケーションの場の一つとなり学校や公共施設、他の団体とのつながりを作ることができた。形に残らずとも、私たち学生が大学で学んだことを地域へと発信することもまた一つの地域貢献の形であると言える。

## 謝辞

ワークショップ開催にあたり、お忙しい中ご協力してくださった、函館みらい館の長岡様をはじめ、みらい館のスタッフの皆様、そして、函館市青年センターの池田様を初め、青年センターのスタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。